

「秋田まごころほうれんそう」の 産地確立を目指して



秋田県角館農業改良普及所 主任 **小松 貢一**

良質生産を目指した現地学習会

1 はじめに

秋田県におけるほうれんそうの栽培はパイプハウス利用による雨よけ栽培が主であり、6月から10月ころまでの出荷が中心となっている。

中でも、仙北地域で生産されるほうれんそうは高品質と鮮度が売り物で、「秋田まごころほうれんそう」のネーミングで、地元秋田市場はもとより京浜市場へも出荷され、評価が高く、より一層の産地拡大が期待されている。

ここでは、その産地形成の経過と栽培のあらまし等について紹介する。

2 地域の概要

仙北地域は秋田県の中東部に位置し、奥羽山脈を境に岩手県と隣接する(図1)。気象的には、年

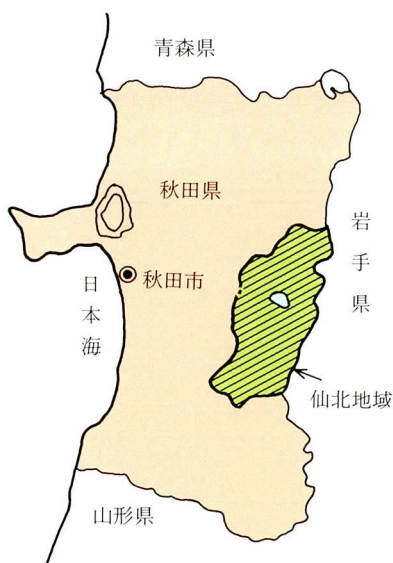


図1 秋田まごころほうれんそう産地位置図

平均気温9.9℃、年降水量2,115mmで比較的冷涼多雨な内陸型気候である。土壌的には、低位の段丘面に分布する黒ボク土及び低地に分布する多湿黒ボク土、褐色低地土、灰色低地土及びグライ土などで、大部分が細粒質のものである。

仙北地域は県内有数の水田地帯であり、「あきたこまち」をメインとした良質米の産地であるが、複合作目としてのほうれんそうの栽培が年々伸びてきている。

3 「秋田まごころほうれんそう」への歩み

仙北地域におけるほうれんそう栽培は昭和56年からスタートしている。これは水田利用再編第2期対策を契機として、西木村JA西明寺の農業後継者12名が26aの水稲育苗用パイプハウスの後作として夏どりほうれんそうの栽培に挑戦したもので、意欲的な技術習得と気象条件とがマッチし、高所得作目として注目を浴びた。加えて、経費面からみても、低コスト生産が可能なことと栽培部会の設立による技術向上と情報交換、仲間づくりの強化等により年々生産量が増大し、JA西明寺はもとより、周辺JAへもほうれんそう栽培の気運が高まり、その後各JA(太田町、中仙町など)においても生産部会が設立され、地域におけるメイン作目として定着した。

しかしながら、各JA単位での出荷ではロットが少なく、大口中心の荷受けの京浜市場への参入が難しかった。加えて、JA間の技術較差や情報量のアンバランスなどの問題もあり、仙北地域一本での生産出荷体制の気運が高まり、関係者が協議を重ねた結果、1991年7月に「仙北地区青果物連絡協議会ほうれんそう部会」(部会長、藤村春之、12

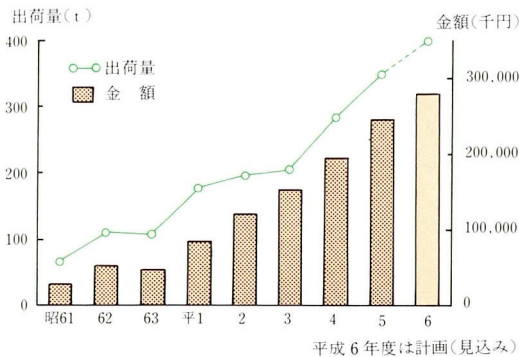


図2 仙北地域におけるほうれんそう生産年次経過

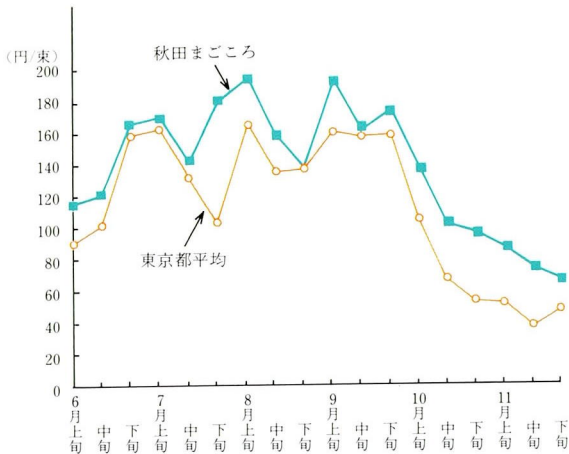


図3 秋田まごころほうれんそう単価推移 (1993)

JAで構成)が設立され、翌1992年6月より「秋田まごころほうれんそう」の統一ブランド名での出荷が始まり、現在に至っている〈ハウス延べ面積約60ha、生産者数約280名〉(図2、3参照)。ちなみに「秋田まごころほうれんそう」のネーミングについては、生産者同志の話し合いの末に決



写真1 栽培検討会(平成6年度の安定生産を目指して)

められたもので、ほうれんそう一本一本、真心を込めて作り上げ、良質のものを消費者に味わっていただきたいという意味が込められている。

なお、産地確立のためには、生産者と関係機関(県、市町村、経済連、JA部会)が一丸となつての取り組みが不可欠である。特に各種事業の導入によるハウス面積の拡大や集出荷体制の整備、栽培技術指導の徹底など意欲的な活動を展開中である(写真1)。

4 栽培のあらまし

1) 圃場の選定と土づくり

当地域においては、水田転作地の作付けが主体であるため、圃場の選定に当たっては、できるだけ耕土が深く、排水の良い圃場を選んでいる。当然、明きょ・暗きょの設置により、雨水や周辺からの水の侵入を防ぐように心掛けている。

一方、ほうれんそうの良質生産=土づくりと位置づけ、有機物の積極的投入をうたっている。これは、堆肥については、春に準備し、一夏熟成させたものを秋(収穫後)に施用し、次年度に備えるというものである。併せて、深耕・心土破碎の実施により膨軟な土壌を保ち、ほうれんそうの根を深く広く張らせ、夏場においても足腰の強いほうれんそうを作り上げることを狙っている。

2) 施肥量

施肥量は基準量として表1のとおり設定しているが、近年、連作が進むにつれ、各養分の過剰残留が問題となっていることから、土壌診断に基づいた施肥体系の確立を図っている。

表1 標準施肥量 (a当たり)

標準施肥量	完熟堆肥	苦土石灰	BM熔リン	備考
窒素成分で 1.0~1.5kg	250kg 以上	20kg	5kg	土壌pH 6.0~6.5に 調整する

※ EC値と施肥量の目安

EC値	0	0.25	0.4	0.5	0.6
施肥量	標準施肥	$\frac{2}{3}$ 施肥	$\frac{1}{2}$ 施肥	$\frac{1}{3}$ 施肥	無肥料

3) かん水

施肥・耕起後、かん水チューブ(スミサンスイRなど)を用いて、たっぷりかん水する。乾燥しやすい圃場においては、播種直後に若干のかん水

を行う場合もあるが、その後、生産途中でのかん水は行わない（品質保持のため）ことが原則となっている。

4) 作型と品種

当地域のほうれんそうの栽培期間は主に4月から11月である。1棟のハウスにおいては、1シーズン3~5回作付けされており、年々、その利用率は高まっている。

使用品種については、品種試験等のデータを基に検討を重ねているが、その主なものは図4のとおりである。

この中で、推進品種として「晩抽ジュリアス」と「アールフォー」が挙げられているが、以下、その栽培ポイントについて記述する。

晩抽ジュリアス (SB 5026)

ほうれんそうの栽培で、最も難しい時期は梅雨期(6月中旬~7月上旬)である。この時期は抽台の恐れがあるとともに、日照不足による品質低下が著しい。そこで、現地試験において、本品種を供試してみたところ、次のような結果が得られた(写真2)。

- ①発芽が良好である(*STEP-II処理の効果と思われる)。
- ②本葉2~4枚のころから葉色が濃く、葉幅がやや広い。
- ③葉肉が厚く、収量が安定している。
- ④生育日数が比較的短い(播種後25日前後)。

注) *STEP-II処理とは：

種子の能力向上(発芽力、生育促進、病害軽減)を図るためトリートメント加工(薬剤の粉衣)と併せて、吸水性が高まるように種子加工(研磨処理)を施したものを。

一方、本品種使用の留意点としては次の事項が挙げられる。

- ①草姿が基本品種に比較して、開張性(横広がり)なので、収穫に若干手間が掛かる。
- ②葉形が中間型のちぢれがやや出やすく、欠刻はない。
- ③乾燥条件下での伸長性が劣る。
- ④萎ちょう病に対する抵抗力はない。

したがって、気象条件(梅雨の程度)や圃場条件(連作程度、乾湿)、労力面などを考慮に入れて使用することが肝要である。

アールフォー

1993年秋期栽培において、リードなど基本品種にべと病の多発をみた。これ

はハウス栽培管理面の問題もあったが、品種間差異が大であった。

すなわち、べと病レース4までの抵抗力を持つ「アールフォー」においては、その発生は皆無で、安定生産を得ることができた(写真3)。

したがって、今後、秋まき品種としては、低温伸長性にも優れていることから、本品種を積極的に採用したいと考えている。

栽培に当たっての留意点としては次のとおりである。

- ①高温時(外気温20℃以上)においては、株が徒長しやすく、細茎となるので、播種期は外気温

播種期	3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月			
	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
基本品種	晩抽パルク						アクティブ						サンライト					
													リード					
推進品種							晩抽ジュリアス						アールフォー					

図4 播種期別適応品種



写真2 左「ジュリアス」、右「晩抽ジュリアス (SB5026)」



写真3 「アールフォー」の生育状況

の最高気温が18℃を割るころからとしたい(当地域では9月中旬～)。

- ②生育日数の目安は、9月中旬～下旬まきで約30日である(その後は日数が伸びていく)。
- ③べと病抵抗性ではあるが、過信しすぎないこと(こまめなハウス管理を行うこと)。

5) 播種

播種は手まき方式や播種機(ごんべえ)、流体播種機(ゲル)、真空播種機、テープシーダーなど多種多様であるが、条まきを原則としており、時期別に播種量、株間を調節する。株張りの良いものを生産するため、最終株間は8cm前後にしている。

夏の高温時においては、土壌の表層が乾きやすくなるので、発芽まで若干の遮光^{しゃこう}を行う場合もある(過度の遮光は軟弱徒長となるので注意する)。

6) 栽培管理

ハウス内に強い風が入ると、ほうれんそうの生育に悪影響を及ぼすので、圃場の風の入る方向に防風ネットの設置を呼び掛けている。

病害虫防除については、基本的に無農薬である。ただし、秋雨期におけるべと病に対しては、前述のとおり品種対応を考慮するとともに、ハウス換気の徹底を図る。やむを得ず薬剤散布を要する場合は初期防除を徹底する。

7) 収穫、調整

収穫に当たっては、できるだけ涼しい時に収穫を行い、速やかに調整して予冷庫に搬入すること



写真4 秋田まごころほうれんそうのパッケージ

を心掛けている。特に圃場においては、ミニ予冷箱(発泡スチロールで作った箱。中にアイスノンを入れたり、上に湿った布をかけたりする)に収穫したほうれんそうを入れ、鮮度保持に努めている。規格は200g袋(鮮度保持用FGフィルム)×25束詰めで、JA担当者による検査はもちろんのこと、生産者による品質チェックも随時行われている(写真4)。

5 今後の課題

安定生産のためには、連作障害回避対策の確立が必要である。そこで当地域においては、各種試験を重ねながら対応を検討しているところであるが、有望視される対策として、①萎ちょう病(フザリウム菌)対策としての太陽熱土壌消毒法の実施、②塩類濃度障害対策としてのクリーニングクロープの作付けや地中灌水方式の導入などの試みが行われている。

また、今後は消費者ニーズに対応した環境保全型農業についても積極的に推進していかなければならないと考えている。

最後に、産地の確立のためには組織のまとまりが絶対条件であり、集出荷体制の強化、生産技術の高位平準化、ロットの拡大などを目的として、今後、より一層、生産者・関係者一丸となった取り組みで、「秋田まごころほうれんそう」の産地確立を図っていききたい。